

様式(7)

報告番号	甲 保 第 21 号 乙 保
論 文 内 容 要 旨	
氏 名	富士 翔子
題 目	Characteristic Autonomic Nervous Activity of Institutionalized Elders with Dementia (施設に入所中の認知症高齢者の自律神経活動の特徴)
<p>本研究では、長谷川式簡易知能スケール改訂版により認知症と診断された高齢者の自律神経活動の特徴を明らかにした。20～40代の健常者26名を対象とし、必要な全てのデータが得られた16名(27.6±8.2歳)を調査対象とした。認知症高齢者は老人保健サービス施設に入所する70人のうち、選択基準を満たした23人を調査対象とした。そのうち、解析に必要な全てのデータが得られた9名(N=9, 83.44±9.45歳)を分析対象とした。自律神経活動を測定するためにホルター心電図を、活動と睡眠を判定するためにアクチグラフを24時間対象者に取り付けた。健常者は調査期間中、自記式の生活日誌に記録をした。また、調査終了時に生活日誌の不十分な内容については研究者による聞き取りを行った。認知症高齢者の行動観察は、臨床経験5年以上を有する看護師および介護福祉士によって行った。ホルター心電図から得られたデータをMemcalc/Chiram3で心拍変動解析を行い、副交感神経活動を示すHigh frequency (HF)、交感神経活動を示すLow frequency (LF)/HFを算出した。アクチグラフはAW2で解析することで得られるアクティビティ・カウント(AC)を解析に使用した。また、睡眠時間はアクチグラフの睡眠判定による時間を使用した。覚醒時の認知症高齢者のLF/HFの平均値は健常者よりも有意に低い値であった(Z = -2.60, p<0.01)。覚醒時では、11名の健常者と3名の認知症高齢者で、LF/HFとACに有意な正の相関関係が認められた(range r = 0.17 to 0.49, p<0.05)。12名の健常者と3名の認知症高齢者のHFとACで有意な負の相関関係が認められた(range r = -0.55 to -0.18, p<0.05)。睡眠時では、3名の健常者と1名の認知症高齢者がLF/HFとACに有意な正の相関関係を認めた(range r = 0.35 to 0.42, p<0.05)。1名の健常者(r = -0.32, p<0.001)と1名の認知症高齢者(r = -0.32, p<0.05)でHFとACに有意な負の相関関係を認めた。行動観察、心拍変動解析、アクチグラフの結果から、認知症高齢者で覚醒時のLF/HFとACとの間に正の相関を示した者は、要介護度が低く、活動への積極性や活動意欲、コミュニケーション能力が良好な者であった。また、覚醒時のLF/HFとACの間に正の相関関係を認めない認知症高齢者もリハビリテーションやコミュニケーションといった活動時にはLF/HFが活動前に比べ高い値を示した。</p>	